技術者からの視点

第7回
グローバリゼーション

藍野大学非常勤講師　木下　親郎

国際化は世界の多様性を認識すること

グローバル化（グローバリゼーション）は、はやり言葉になりいたるところで出てくる。国立国語研究所は「地球規模化」あるいは「地球一体化」の訳語を提案しているが、均質の世界を目指し、地方固有のものの存在を少なくすることに使われているような感じがする。しかし、技術者の世界ではグローバル化は「世界の多様性」を認識することにあると思う。

私の海外との本格的なかかわりは約四〇年前のオーストラリアになる。客先技術部門の最高責任者は副社長で、オックスブリッジ・イングリッシュを喋る英国紳士であった。技術部長はニュージランド人で、シドニーのパブで耳にするオーストラリアン・イングリッシュを小声で喋った。担当課長はスコットランド訛りの英語を話した。若手の技師は標準的な英語を話したが、興奮するとオーストラリアン・イングリッシュになった。

我々は日本式英語である。打ち合わせの席では、いろんな訛りの英語が飛び交った。彼らは米語を嫌い、英語表記にこだわった。例えば、プログラムは〝programme〟と綴った。信頼性を増すために、部品、回路などを二重にすることを「リダンダンシー（冗長系）」というが、日常会話では「解雇」を意味するので、彼らは「冗長系」をアメリカン・リダンダンシーと言った。

今まで常識と思っていたことの多くが、オーストラリアの常識ではなかった。外国では、まず相手の考えを聞きだし、自分の考えをまとめ直し、その上で自分の考えを自分の言葉で表現しなければならないと学んだ。つまり「世界は想像以上に多様である」ことを知ったのである。

信頼関係を築くのも、相手の価値観を理解することが基本

経験を積み責任が大きくなってくると、話し合う内容が大きく変わった。国内では、実績のある相手との仕事が多いが、海外ではほとんどの場合、初めての相手である。したがって、相手が信頼できるかどうかを確かめるのが最大の課題になった。このような場では、相手の持つ多様な価値観を理解し、誠実に粘り強く交渉する能力が必要になる。専門知識以外に、相手と共有できる話題を持つことも大切である。流暢な外国語だけでは信頼を得ることは難しい。最近はインターネット上で、面識のない相手と瞬時に契約が出来る時代になったが、技術仕様の交渉が必要な分野では、「信頼の出来る相手としか契約を行わない」というのが原則である。

米国人と英国人では信頼についての基準が異なるようだ。米国人の会社幹部からは短時

間の話し合いでコミット（約束）を得たことがある。英国人から信頼を得るには時間がかかるが、一度信頼を得れば、その関係は長く続く。

言葉は、国の自立と他国との違いを証す文化

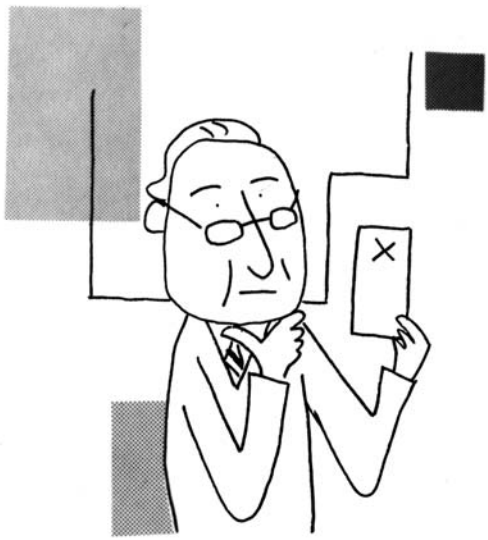
七〇年代に衛星通信地上局の商談でアフリカ諸国に行く機会が多くあった。これらの国々には、ヨーロッパ列強による植民地支配の残渣があり、国際通信はまだ旧宗主国に依存していた。旧英国植民地の国から隣国に国際電話を行う場合、回線はまずロンドンにつながり、そこから隣国につながるのである。相手国の旧宗主国がフランスの場合には、ロンドンからパリ経由で接続された。衛星通信を導入すると、通信衛星を経由して相手国との直接通信回線が接続される。これらの国の若手官僚は衛星通信地上局を持つことが、その国の自立の証しになるのだと情熱的に語っていた。これはグローバル化であり世界がより多様になるということである。

サウジアラビアからリビアに空路で行ったことがあった。空港のタクシー運転手にアラビア語で行き先を記したメモを渡したが、彼は字が読めなかった。仕方なくサウジアラビアで覚えたアラビア語の単語をまくし立てて無事目的地に到着することができた。私の発音がリビアで通じたのは驚きであり、アラビア語圏の広さに驚嘆した。

スペインでは私の片言のイタリア語とマドリッドのタクシー運転手のスペイン語とで十分に意思の疎通が行えた。スペイン人とポルトガル人とがそれぞれ自国語を用いて会話をしているのも見た。アラビア語、スペイン語が共に国連の公用語になっているのを納得した次第である。

グローバリゼーションとアメリカニゼーションを混同する心配

日本のグローバル化指標の一つは国連の場で活躍している日本人の数ではなかろうか。日本の組織に所属し、海外で活躍する人は多くなっていると思う。しかし、国連など国際機関の職員になっている日本人は少ないようだ。国連職員として働くには、少なくとも二つの国連公用語に通じる必要があるという。日本語が国連の公用語になる可能性は少ないので、日本人は二つの外国語を習得しなければならない。

最近、小学校低学年からの外国人教師による米語教育が行われつつある。結構な話であるが、米語教育にこだわりすぎると、アメリカ化（アメリカニゼーション）をグローバル化と思いこんでしまう危険がある。小学校での外国語教育は、世界が多様であることを教え、将来、複数の外国語を勉強する意欲を持たせるものであって欲しいと思う。多様な世界の中で主体性を持つためには、それだけの見識を持たねばならないことも教えて欲しい。そのためには、外国語教育以外に日本文化の教育に力を入れる必要がある。

最近、日本から発送する航空郵便には〝BY AIR MAIL〟と英語で表示することを薦めている。かつて、郵便局の窓口で貰った航空郵便に貼り付ける小片（票符）には日本語（航空）のほかに仏語、英語が併記されていた。日本語、仏語を省略した英語のみの表示は、日本を忘れ、米国に重点を置くアメリカニゼーションをグローバリゼーションと考え違いしている表れではないかと心配している。